

第三部「梅干しの種五つ」後編

おばたみお

小幡美桜の住んでいるのは、学区の南西側に位置する県営住宅だった。昭和三十年代後半に建てられたらしい。ぼくの父さんも母さんも生まれる前だ。たぶん「高度成長期」という時代なんだろう。

まったくそっくりな姿形の四階建ての団地が、三棟ずつ、合計六棟並んでいる。鉄筋コンクリートの外壁は暗い灰色をして染みだらけで、ところどころ稲妻のような形のヒビが入っていた。

「美桜、携帯持っていないからアポなしで来ちゃったけど、大丈夫かな？ 自宅にかけてみるね」

キムウナ

金銀河が言った。

この地域は、小さな町工場が集中している。大手自動車会社の下請けの下請けの下請け……といった工場だ。

ぼくが生まれる少し前から、この地域に外国人労働者が増え始めたという話を、カンさんから聞いたことがある。

去年、外国人専門の人材派遣会社ができ、かなりあくどいピンハネをしている、というので、うちの組——もちろん学校のクラスのことじゃない——が相談を受けたことがあった。若水さんとカンさんたちが動いた結果、その会社は解散して、経営していた人たちは、この街から去ったという——念のために書いておくけど、その悪徳人材派遣会社のお偉方は、コンクリート潰けにされて海に沈められたワケじゃない——たぶん。

ぼくたちが県営住宅の敷地に入ると同時に、幼稚園児くらいの肌の浅黒い男の子二人が、ぼくたちの脇を駆け抜けて行った。外国人だったけれど、聞こえてきた単語は、

「バトロン星人」

「スペリウム・フラッシュユ！」

といったものだった。

「いつの時代も子どもは変わらないものだね」

と、亀島が間髪入れず、

「不老だつて子どもだろう？」

亀島に拍手喝采を送りたくなつた。

「ああ、怖いこと！」

不意に耳障りな声が耳に突き刺さり、ぼくは振り返つた。

片手に買ひ物袋を下げたおぼさんだつた。ぼくの母さんよりも年上の人だ。たぶん五十代だろうか。その表情は険しく、走り去つた二人の子どもたちに向けられていた。

「ほんつとに、フィリピン人は礼儀知らずなんだからっ」

吐き捨てるような口調で、聞こえよがしに——いや、まさにぼくたちに聞かせるために言つたのだろう。

何か不愉快な石のような塊が下つ腹に膨らんできた。

すると、不老が意外な行動をとつた。そのおぼさんに近づいたのだ。

「あの子たちが、何か危険なことをしましたか？ それとも単なる偏見ですか？」 2

一瞬、おぼさんが怪訝そうな表情になつたが、すぐに先ほどの子どもたちに向けたのと同じ視線を不老に突き刺した。

「ここは日本よ！ 中学生？ 学校はどこ？ 校長先生に言いつけるわよ！」

不老は、おぼさんの剣幕に臆することはなく、小学校の名前を言い、自分の名前も告げた。

「どうぞ告げ口なさってください。しかし、何を？ むしろ、さっきの子どもたちに謝罪すべきです」

おぼさんは虚を突かれたように後ずさりながら、

「ああ、怖い怖い。最近の子はどうしてこうなつちやつたんだろう……」

と、わざとらしく言い捨てた。おぼさんはぼくたちに背中を向けて県営住宅の敷地から、出て行こうとした。

意外なことに、亀島が出し抜けに声を上げた。

「ちよつと待てよ！」

おぼさんは無視を決め込んで、そのままぼくたちから離れて行こうとした。

「俺の親友は日系ブラジル人だ！ それが悪いことなのかよ！」

続いて金銀河までが大声を上げたのには、さすがに驚いた。

「わたしは在日朝鮮人四世だよ！」

「そして僕は、イギリス人とのクォーターです」

最後に不老翔太郎が、平然と言つてのけた。

おぼさんの姿は、県営住宅の敷地を出て、角を曲がつて消えた。

「マジでえっ？」

不老翔太郎に向けたぼくの声は、これ以上裏返りないようなないほど裏返つた。

「無論、ウソだよ。一度言つてみたかっただけさ」

不老はこともなげに言つてのけた。

腰から下の筋肉が脱力する。不老と一緒にいると、よく体験することだけど。

が、金銀河の黒い眼は、どことなく潤んで見えた。

「まだいるんだ、ああいう人……あーあ、久しぶりに怒鳴っちゃつた」

「さて、と。銀河さん、小幡さんの家はどつちかな？」

静かに不老は言つた。はつと我に返つたような金銀河の表情。

「美桜の家は、もっと奥のほう。B棟の21号室」

すぐにいつもの金銀河に戻り、につこりと微笑んだ。

いっぽう、亀島の怒りは治まつていない様子だつた。

B棟の前まで来たときだつた。唐突に先頭を歩いていた金銀河が立ち止まつた。

「あれ……萱場先生かやばのバイクじゃない？」

建物の脇の自転車置き場からはみ出るように停められている。間違いない。つい

数時間前に、学校の駐車場で見ただけの250ccのバイクだ。

「さつき電話したら、お母さんが出て、美桜はいないんだつて。今、萱場先生は美桜の家にいるのかな？」

亀島が険しい顔つきになつた。

「どうして萱場先生が小幡の家に……？ あつ、まさか萱場先生も……？」

「そういうことね。だつたら、教室で亀島君に言つたことも理解できる」

金銀河が言う。

ん？ 「そういうこと」 って、 どういうこと？

ぼくだけが、完全に取り残されていた。何が何だかさっぱりわからない。やつぱり三人についてくるんじゃないかった、といじけた気分にもなる。

「親愛なる伝記作家には、事実関係を理解してもらわないと困る。いいかい、萱場先生が小幡さんの家に来た目的、それは、我々と同じなのさ」

「え？ じゃあ、ちょ、ちょっと待って。えーと、確か、『二度と事件は起こらない』 って『帰りの会』で言ってたね。すると……犯人は小幡？ っていうことは……はじめから萱場先生は犯人を知ってたのか？」

「小幡さんが犯人、もしくは犯人の一人かどうか、それはわからない。が、萱場先生が、我々と同じ目的で奔走していることは確かだ」

突然、亀島が首を振りながら、言った。

「わかった、もういいよ。帰ろう」

「ちよつと待ちたまえ、亀島君」

不老が例の「たまえ」を放ち、亀島と対峙した。

「不老、被害者の俺がもういい、って言ってるんだよ。梅干しなんてどうだつていいじゃないか。結局、俺が怪我したわけでもない。中毒になったわけでもない。もう二度と起こらないんだろ？ もう探偵ごっこは終わりだ」

「いいや、終わっていない。亀島君、君は僕の『依頼人』じゃない。謎がすべて解き明かされるまで、僕は『梅干しの種五つ』を追い続けるよ」

亀島は語気をさらに荒げた。

「だから、それはもうやめろ、って言ってるんだ！」

ぼくはただ、アタフタして二人の男を交互に見ることしかできなかった。しかし、金銀河は冷静だった。

「意地張って、言い合っている場合じゃないでしょ。ほら、萱場先生が出てきた！」
不老と亀島は口をつぐんだ。

萱場先生は、ぼくたちが隠れていることにまったく気づいていない様子だった。いつもよりもやや猫背気味で、どこか哀しげに見えたのは、気のせいだろうか。萱場先生はそそくさとヘルメットをかぶり、バイクにまたがり、エンジンをかけると走り出した。その後ろ姿は、県営住宅の敷地を出て、すぐに小さくなって交差点を

曲がって消えた。

およそ一分間、ぼくらは沈黙していた。

破ったのは亀島だった。それも、わずか一言だけ。

「帰る」

きびすを返し、亀島はもはや有無を言わせぬ歩調で歩き出した。

金銀河は、遠ざかる亀島の背中を見、それから不老を振り返った。

「わたしが、亀島君を説得する」

「無駄だろうけど、銀河さんが行きたいなら、どうぞ」

不老の言葉に感情は一切こもっていないかった。こいつは機械仕掛けの推理マシンなのか。

金銀河は少しためらう様子を見せた。が、何かを決意したかのように、亀島が去った方向へ走って行った。

結局、金銀河は、不老翔太郎ではなく、亀島佑作を選んだ、ということだろうか？ そんなことをついつい考えるぼくは俗物だな、と思った。

不老は、両手の指先をあわせて、中途半端な「合掌」のような仕草をし、眼を閉じた。

そのあいだに、不老の脳味噌がフル回転していることがわかった。

不老は眼を開いた。

「さて、小幡美桜さんの家にお伺いしようか」

「はあ？ 何考えてんの？」

思わず声が大きくなる。

不老翔太郎は、つかつかとB棟に向かって歩き出した。

ぼくたちは、B棟の21号室へ向かった。

「美桜は今、お友だちのおうちに行っているの……」

小幡美桜のお母さんは、申し訳なきそうに言った。

たぶん、ぼくの母さんよりも十歳くらい年上だ——少なくとも、そう見えた。髪には白いものがちらほらと見えて、おそらく化粧はしていない。ややうつむき加減に、不老のほうに体を向けていた。

県営住宅は、想像していた以上に狭かった。

ぼくたちが立っている玄関のすぐ左手にあるドアはトイレだろう。その奥に六畳の和室——畳はかなり古びて黄色くなり、毛羽立っているのが、玄関からも見て取れた。その右手にもう一室あるようだ。その向こうはベランダだろう。おそらく、ここから死角になる左側にはキッチンとバスルームがあるのだろう。ずいぶんと家具は少ない。玄関から見えるのは、こたつ兼ちゃぶ台と、その背後の壁際のプラスチック製衣装ケースだけだった。ずいぶん質素なたたずまいの部屋だった。

黒川の家とは、ずいぶんと雰囲気が違う。

「お友だちというのは……金銀河さんですか？」

素っ頓狂な質問をするので、ぼくは不老の頭がどうかしたのかと思った。いや、この男の頭は、以前から「どうかしている」んだつたつけ。

が、小幡のお母さんの答えは意外なものだった。

「そうそう。銀河ちゃんと一緒に、〈レインボー・タウン〉に行くとか……」

それが癪なのか、小幡のお母さんはしきりにまばたきをしながら、やや下を見ていた。

〈レインボー・タウン〉とは、ちょうど一年ほど前にできた、「郊外型大型ショッピング・モール」というやつだ。車が千台くらい停められる巨大な立体駐車場があり、その駐車場よりもさらに巨大な建物に、スーパーがあり、書店もあり、CDショップもあり、映画館もゲームセンターもあり……とにかく、一日中いても飽きない、と言われている場所。その巨大施設を建設をめぐって、地場ゼネコンと、与党国会議員を後ろ盾にして大手ゼネコンのあいだで激しい暗闘があった——などということは、ぼくの耳にも否応なく入っていた。けれど、それはまたべつの話だ。

学校からは、「子どもたちだけで行かないように」という厳しいお達しが先生から毎週のようにあるけれど、学校から自転車で三十分もかからないので、遊びに行く生徒は多い——らしい。というのも、ぼくは行ったことがない。特に行きたくとも思わない。

いや、正確に言おう。こんなところに一人で行ったって面白くない。そしてぼくには、一緒に行くような友だちがない。単純明解な論理だ。明智小五郎でなくたって、解明できる。

「不思議ですね。十分くらい前まで、僕は銀河さんと一緒にいたんですが……?」
不老は、じつと小幡美桜のお母さんを見つめた。

一瞬にして、ぼくは現実に戻された。

小幡美桜のお母さんは、唇を噛み締めるようにして、コンクリートの三和土に視線を落とし、何度も何度もしきりにまばたきを繰り返した。

不老は静かな口調で言った。

「実は美桜さんにお訊きしたいことがあってお伺いしたんですが……またべつの機会にします。週明けに、学校で会えますから」

「ごめんなさいね、せつかく来てくれたのに」

小幡美桜のお母さんは、顔を上げ、笑顔を見せた。それでもやはり、しつこいほどに、まばたきをパチパチと繰り返している。

「あ、一つお願いがあるんですが……」

不意に不老は言った。今度は何を言い出すのか、と心臓が凍結しそうになった。

「喉が渴いてしまったので、水を一杯いただけれますか?」

「お水? はい、ちよつと待っててね……」

小幡美桜のお母さんは相手を崩し、室内のキッチンへと向かおうとした。

予測してすぐに止めるべきだったのだろう。が、一瞬出遅れた。不老翔太郎はためらうことなく靴を脱いで上がり込んだ。

「不老、待てよ……」

無論、ぼくの声を聞く人間ではない。

小幡のお母さんも狼狽しているのがわかった。まばたきの頻度がさらに上がった。その表情を見た瞬間、ぼくも考えを変えた。靴を脱いだ。不老のあとを追った。

「あの、えつと、お、お邪魔します」

ここに来て、ぼくがはじめて発する台詞だ。

明らかに歓迎されていない強い視線を受け止めながら、不老翔太郎の背中に隠れるように、部屋に上がった。

予想通り、左手がキッチン——というより日本語で「台所」と表記したほうがいい雰囲気だ。いくつかの段ボール箱が置いてある。野菜などが入っているようだ。その横に、冷蔵庫があった。一瞬、それが何の「機械」なのかわからなかった。な

ぜなら、ぼくの家にある冷蔵庫の三分の一くらいの大きさだったからだ。

一口のガスコンロ。そこには古びてかすんだ色のヤカンが載っている。そして、隣には小さなシンク、というか「流し台」。小さなへこみのある鍋が流し台のなかに置かれていた。

「質素——という以外に言葉が見つからなかった。

小幡美桜のお母さんは、ぼくと不老を交互に不審そうに見ながらも——パチパチとまばたきを繰り返して——、二つのコップに水道水を注ぎ、手渡してくれた。

正直言つて、ぼくには「水道水」を飲む習慣はない。我が家のキッチンには浄水器が備え付けられている。それに加えて、ミネラルウォーターのタンクを宅配してくれるウォーター・サーバーもある。そのどちらかしか飲まない。水道の水なんて、トイレで流すのと、手を洗うのにしか使ったことがない。

が、そんなことはおくびにも出さないだけの常識は、ぼくだって持ち合わせていた。水道水を一気に飲み干した。気のせいか、げっぷが出そうになった。それを我慢しながら、コップを小幡美桜のお母さんに返した。

不老はというと、たかが一杯の水道水を、味わうかのように時間をかけて飲んでいた。

「どうも、お邪魔しました」

ぼくは言つて、不老の腕を引っ張った。不老は慌てた様子もなく、悠々と水道水を飲み干し、「ごちそうさまでした」とコップを小幡のお母さんに手渡した。

玄関まで戻り、靴を履くと、やつと気持ちが落ち着いた。今まで妙に緊張していたことをあらためて気づいた。

唐突に、不老翔太郎が言った。

「毎年、3Lサイズなんですわね」

「え……？　そうなの。不老君……だったわね、詳しいのねえ」

小幡美桜のお母さんが戸惑いのいろを浮かべながら、やはりしきりにまばたきをしながら答えた。

「うちでもやっていますから。うちは毎年、2Lサイズです。この街に引っ越してきたばかりなので、ドヨウの暑さはわかりませんが」

頭を抱えたい。またもや、不老が意味不明の言語を発し始めた。

「ちょうどいい感じよ。お母様によろしくね」

小幡美桜のお母さんは、笑顔で言った。

不老はすぐにドアを開けた。ぼくも慌てておざなりのお辞儀をした。

「ところで、萱場先生は味見をされたんですか？」

ああ、脇にいるぼくの頭はおかしくなりそうだ。「言語明瞭、意味不明瞭」とはこのことなのだろうか？

しかし、確かに不老の言葉の直後、小幡美桜のお母さんの顔色が変わった。笑顔が消滅し、一瞬にして表情が硬直した。まばたきの回数が増えた。

「お邪魔しました」

不老は相変わらずの口調で言った。

ドアを閉じたのは、小幡美桜のお母さんのほうだった。

ぼくたちは階段を下り、B棟の外に出た。

「やはり、そういうことか……」

不老翔太郎は、薄暗くなり始めた空を見上げながら独りごちた。

「そういうことって、どういうこと？ 土曜って、明日だよ。確か、天気予報じ

ゃあ、『曇りときどき晴れ』みたいだったと思うけど……？」

「御器所君」

不老は、不意にぼくの顔を覗き込んだ。

「へえっ？」

やつぱり、間抜けな声しか出せないぼく。

「君みたいにイノセントな思考ができることを、僕はうらやましく思うよ」

不老は言いながら、足早に歩き始めた。「いのせんと」ってどういう意味だっけ？

と思いつながら、ぼくは不老の背中に向かって言った。

「あのさ、それって、全然褒め言葉に聞こえないんだけど……」

「無論、褒めてはいない」

実に実に冷静かつ正確な答えが返ってきた。

ぼくは、もう何度目かわからないほどのため息をついて、不老の背中にもう一度声をかけた。

「どこ行くの？」

「帰るだけだよ」

「亀島や金は？」

『『帰宅する』』という結論に達していることだと思っよ」

不老はぼくのほうを振り返りもせずに言った。

そのとき、ぼくのポケットのなかで、携帯電話が振動した。取り出すと、金銀河からの着信だった。ちよつと、いや正確には、かなりドキドキする——いろいろな意味で。

「もしもし……」

「いい、驚かないですよ？」

「へ？」

間抜けな声しか出せない。顔が赤くなつたけれど、電話では顔色までは相手に見えないのが救いだ。

「わたしたち、萱場先生を見つけたの」

「わたしたち？」

「わたしと亀島君に決まつてるでしょ！」

「あ、そうか……」

いつも金の前では間抜けな役回りしかやらせてもらえない。

「萱場先生がどこに行ったかわかる？」

いつの間にか、不老がぼくの携帯電話に耳をぴったりとくっつけて顔を寄せているのに気づいた。

男子に顔を密着されて喜ぶ趣味は、ぼくにはない。不老を押しつけた。

「わからないけど……つまりこの近く？」

「そう！　なんでわかつたの？」

金銀河の驚いた声。心地よくぼくの鼓膜を振動させる。こんな機会があるだろうか。金銀河の前で、推理を披露できるなんて。

「だって、走ってバイクに追いつくことができたんなら、そんなに遠くはない、つてことだよな」

あろうことか、不老はぼくの推理を賞賛することもなく、携帯電話をぐくぐく当たり前であるかのように取り上げた。

ぼくは横から不老の顔をくつつけて聞いてやろうと思った——が、ムリだった。不老のほうが、ぼくよりも二十センチ以上も背が高い。背伸びをしたって、届きはしない。

こうなると、ぼくは完全にのけ者だ。

『孤独なバイク乗り』の萱場先生は、ごく近いこの県営住宅内を移動したんだらうね」

「ええっ!」

ぼくは聞き間違いかと思って、飛び上がった。

「……なるほど、わかったよ。そうしよう」

言うや否や、不老は携帯電話をぼくに放つてよこした。慌ててキャッチする。すでに、電話は切れていた。

どっと疲れが出てきた。忘れかけていた空腹が、倍増してぼくの胃を刺激する。

「さて、今日のところは、これで解散だ。少なくとも、今、この瞬間に我々ができることはない。さて、帰ろう。御器所君が腹ぺこで倒れられてもらったら困る」

冗談じゃない。納得できるはずがなかった。しかし、ぼくがいくら声を上げようと、不老が決めたことを覆せるわけがない。

いつぼうで、不老の言うとおり、空腹に耐え難かったのも事実だ。給食のときに奪い取られたフルーツミックスゼリーの姿が、脳裏にちらつく。

いずれにせよ、ぼくの腹立ちの原因は、不老翔太郎という男以外の何者でもなかった。

ぼくと不老は、哀しいかな、家が同じ方向だった。

県営住宅の敷地を出ようとするとき、またしても、あのおばさんがいた。

ぼくと不老に剣呑な視線を容赦なく向けてきた。

「ああ、怖い怖い、最近の子どもは……親の顔が見てみたいわ……」

聞こえよがしに言いながら、おばさんはぼくらが来た方向へと足早に去って行くこととした。

「そのとおりですよ」

不意に、不老がつぶやくような声で言った。おばさんに視線を向けることはなかった。

「子どもは、怖い存在なんです。たぶん昔も、今も、ずっと」

おぼさんの後ろ姿が歩みを止めた。

不老はやはり、まっすぐ前方を見つめたまま、ほとんど独り言のように言った。

「しかし、その怖い子どもを生み出したのは、誰なのでしょう?」

言うなり、不老は足早に歩き出した。

ぼくは、おぼさんがどんな反応を示したのか確認することもできず、慌てて不老翔太郎の背後から、県営住宅の敷地を出た。

ぼくと不老は、ずっと無言のままだった。珍しく、ぼくのほうが先に立って足早に進んだ。

とにかく、腹の虫が治まらなかった。腹は減っていたけれど、それでも同時に腹が立っていた。無性に腹が立っていた——特に、不老翔太郎という男に。

いつの間にか、ぼくの家近くの近くまで来ていた。

その瞬間だった。何がきっかけだったのか、わからない。まったく出し抜けに、ぼくの脳細胞がパチパチと火花を飛び散らせた。

「そうか、わかったんだ……!」

日が長くなつてはいたが、すでに周囲は薄暮に包まれていた。けれど、ぼくの眼の前は、急激に音を立てて明るさを増していくような気分になった。

「そのとおりだよ、御器所君」

はじめて不老が口を開いた。

「そのとおり、って何が?」

「だから、君の考えているとおりだ、という意味さ」

「ぼくの考えてることなんて、なんでわかる?」

突っかかるように言った。

「亀島君には、事件の真相がわかった。わかってしまった。だからこそ、僕たちを追い出すかのように、突き放した。そのことに、御器所君も今気づいた、ということだろう?」

「そうだよ、亀島は——」

言いかけて、口をつぐんだ。不老は、まさに揉み手をするといった感じで、両の

手の平をごしごしとこすりあわせている。

「あのさ……ほんとうに……不老って、つまりその……霊能力とか、テレパシーとか、そういうの、持ってないの？」

ぼくは唾をごくと飲み込んだ。

「霊能力！ テレパシー！ 君のユーモアのセンスは実にクラシカルだね！」

べつにユーモアで言ったんじゃないんだけど。

「どうして、ぼくが気づいた、ってことに不老は気づいたの？」

「初歩的なことだよ、御器所君」

わざとらしく、右の人差し指を立てて、ぼくの顔面の前で振って見せた。人を不愉快にさせる才能で、こいつの右に出る者はいないんじゃないか。つくづく思う。

「県営住宅を出てから今までの……およそ二十分のうちに、君のおなかは十九回鳴った」

「余計なお世話です」

「そのあいだ、僕たちは道すがら、一軒のファミリィ・レストラン、三軒のコンビニエンス・ストア、二軒のハンバーガー・ショップ、一軒のお好み焼き屋さん、二軒のラーメン屋さんを通り過ぎた」

「だから？ それがどうしたの？」

「君のような食いしん坊が——しかも、相当の空腹に耐えかねている大の食いしん坊が、すぐ近くの食べ物に眼もくれなかった、ということさ。それには、理由があるに違いない。つまり、食いしん坊の君ですら空腹を忘れるほど、考え込んでいた」

何度も何度も「食いしん坊」と言うな、と思っただけれど、確かにそれは事実だった。

「今、この局面で食べ物よりもっと重要なことといえば、一つしかない。それに、そんな君が顔を上げたのは、三回だけだった」

不老にじろじろと観察されていたのかと思うと、なんだかぞつとした。背筋に凍ったムカデでも這っているような気分だ。

「七回目に御器所君のおなか鳴ったとき、君は顔を上げた。てつきりコンビニでもあるのかと思いきや、眼の前には、歯科医院があった。さらに十三回目におなか鳴り、顔を上げたとき、同様に歯科医院があった」

そこで、不老は不意に腕を組んだ。どうしてこいつは、一挙手一投足にかっこつけたがる？ いや、本人にはまったくその意識がないから、いつそう腹立たしいのだが。

不老は続けた。

「僕だって、銀河さんとの電話で、県営住宅から尻尾を巻いて帰らなければならなかったときには、不可解だった。君と同じように、腹も立った。御器所君、さすが、僕の親愛なる伝記作家だ」

だからその「シンアイナルデンキサツカ」っていうのをやめて欲しいんだけど。

「君の推理は間違っていないよ。亀島君は——証拠は得ていないが——事件の真相に気づいた。気づいてしまった」

「ちよつと待った。全然、答えになってないよ！ ぼくが知りたいのは、どうして亀島が真相に気づいたことに、ぼくが気づいたことに、不老が気づいたこと……えーと、それでいいんだっけ？ つまり……とにかくそれが、さっぱりわからないんだよ！」

不老と話していると、自分の脳味噌を、太いスリコギでかき回されるような気分になってしまふ。それをごまかすために、ついついぼくの声は大きくなった。

「話は最後まで聴きたまえ」

もう「たまえ」はたくさんだ。ため息はいくらでも出る。と同時に、またもやぼくの腹の虫が「ぐおるるる……」と悲鳴を上げた。

「僕は、君が顔を上げたのが三回だ、と言ったね。二回は歯科医院の前。三回目は、ここから五十メートルほど手前、ほら、ここからも見えるよ。あの通りの向かいにあるスポーツ用品店の前だった。そのときに十八回目のおながが鳴ったことは、付け加えておかなくてもいいだろうが」

ぼくは一瞬、呼吸をするのも忘れて、不老を見た。

そして、確かにぼく自身が見たはずのスポーツ用品店の看板を指さした。

「どうして……」

「デュパンの真似をしただけさ」

「ルパンって……泥棒じゃないか……」

ぼくが言うと、不老は大きなため息をついた。

「ルパンじゃない。デュパンだよ。そういうえば、君の部屋の本棚には、エドガー・アラン・ポーの本はなかったね」

「江戸川乱歩なら『怪人二十面相』と『少年探偵団』は読んだ」

不老翔太郎は、わざとらしく空を仰ぎ見た。日が長くなってきたとはいえ、もうすでに日没を過ぎて、辺りは薄暗くなっていた。

「その話は、またべつの機会にしよう。今日はもう遅くなった。君のおなかも忍耐の限度を過ぎているだろう？」

そう言われるや否や、まさにグッド・タイミング、いや、バッド・タイミングで、

ぼくの腹は例の「ぐおるるるる」という悲鳴を上げた。

ぼくは恥ずかしさを隠すために、わざと声を荒げた。

「不老は納得しているかもしれないけど、ぼくは全つ然、わけがわからない。ぼくがほんとうに『伝記作家』だつて言うなら、ちゃんと教えてくれよ」

「いや、御器所君。君はもうわかっているはずじゃないか。ただ、我々に共通している点は、証拠がない、そして、動機もわからない、ということだけだ」

「へえ？」

ぼくはまったく何もわかってないんだけど。

「ぼくはこれで失敬するよ」

「シツケーつて……？」

気づくと、ぼくたちは、いつの間にかぼくの家の前に着いていた。

不老は、立ち止まることもせず、そのまま足早に立ち去りながら、ぼくに背中を見せて手を振っていた。

まったく、なんて傲慢で自己中心的な男なんだ。

腹立たしい思いで、小さくなつていく不老の背中をしばらく見ていた。

そのとき、何もしていないのに、インタフォンから声が聞こえた。

「坊ちゃん、お帰りなさい」

ジンさんの声だった。ちゃんと監視カメラでぼくの帰宅は見られていたらしい。

ゆつくりと、防弾仕様チタン合金製の扉が、眼の前で開いた。

ぼくは、さつき不老が指さしたほうを見た。

スポーツ用品店の看板が、薄暮の向こうに、かすかに見えた。

その看板にはこう描かれていた。

——ヒガシスポーツ サッカー・フットサル専門店

この「梅干しの種五つ」事件には、ぼくも不老も最初から関わらなかつたほうがよかつたのではないか。痛いほどそう思った。

うとうと……としかかつた、と思ったときだった。なぜか、眼が醒めた。

時刻は午前八時三分。「うとうと」と思っていたけれど、結局、七時間以上も眠っていたことになる。いずれにせよ、いつもの土曜日ならば、熟睡しているはずの時刻だ。

そのタイミングで、部屋のドアがノックされた。

ドアを開いたのは、アイリーンさんだった。

「おはようございます。坊ちゃん、もう起きてますか？」

「あ、うん。今から下に降りようと思ってたところ。ごめんね。わざわざ」

もう朝ご飯の支度はできているはずだった。

「お友だちが来てますよ」

「へえっ？」

裏返った声が出た。まさか、とは思った。口のなかで急激に乾燥していく。

「ほら、あの変わった子」

案の定だ。

「ああ……この前は、あいつがヘンなこと言っちゃって、ごめんね」

頭を抱えてベッドに潜り込みたかつた。

「今日は気分が悪いから寝てる、って伝えてくれる？」

「御器所君は、おそらく自分だけが蚊帳の外に置かれた気分で、御機嫌斜めだろうから、仮病を使う可能性が高い——」

「はあっ？」

「……って、あの子、不老君が言っていましたよ」

ほんとうに熱が出てきそうだ。わざわざこんな場面で推理力を働かさなくてもいいだろうに。

「ところでお坊ちゃん、『カヤ』って何ですか？」

「あの……たぶん、テントみたいなもの……かな？ 実物を見たことないけど。蚊とか虫が入ってこないように、部屋のなかに吊して使ってたみたい」

「アン、ハ！ Mosquito Net のことですか。」

「モスキート・ネット？ 英語でそう言うんだ」

「わたしも、使ったことがありますよ」

「へえ、日本で？ アメリカにもあるの？」

訊ねたが、アイリーンさんは少しだけ肩をすくめるような仕草をして、話題を変えた

「不老君、待つてますよ、門の前で」

「え？ あの、朝ご飯は……？」

アイリーンさんは、両の掌を天井に向けて、肩をすくめた。さすがアメリカ人だ。いやいや、そんなことに感心している場合じゃない。急激におなががすいてきました。ますます不老翔太郎へのいらだちは募った。

「パストラミ・サンドとオレンジ・ジュースは美味しかったかい？」

唐突に、不老は言った。

「な、なんでわかつたの？」

愚問だと思いつつも、訊かずにいられない。

「初歩だよ、御器所君。まず、ぼくがインタフォンのボタンを押してから今まで……ええと、七分十七秒たっている。そのあいだに、食いしん坊の君が朝食抜きで現れるとは考えられない——たとえば、顔を洗ったり、歯磨きするのを忘れたとしても」

「歯磨きはしたよ！ 朝ご飯の前に」

「食前に歯磨きをして、食後にしないのは、とても奇妙な慣習だと思わないかい、御器所君？」

知ったことか。

「さて、君のような食いしん坊が短時間におなかに詰め込むことができるのは、サンドイッチか、おにぎりといったところだろう。君のズボンにパンくずが付着している。そして、食後に歯を磨いてない君の唇の端に辛子マヨネーズと思しきものが付いているし、かすかに君の吐息からは胡椒の匂いがする。オレンジ・ジュースに

ついでには、言わずもがなだね。君のシャツの左袖に付いている黄色い染みだ。慌てて食べると消化に悪いが、それにしても、もう少し上品に行儀良く食事をしたほうが、もつと美味しくいただけれると思うよ」

まったくもつて、不老翔太郎の「推理」に間違いはなかった。それがよけいに腹立たしい。でも、ぼくは何とかして抗弁したかった。

「予告もなくこんな時間に不老が来るから、しかたなかったんじゃないか……」

「さて、行こうか？」

人の気持ちを察しない。不老の持つ実に実に素晴らしい才能の一つだ。

パストラミ・サンド一切れしか口にしていないというのに……時間なかったから、ハム・トマト・サンドも、ツナマヨ・ポテト・サンドも食べられなかったのいうのに。

いつか、この男には「食べ物の恨みは恐ろしい」ということを教えなきゃいけない。どうやったらいいのか、それが問題だ。

「どこ行くの？」

「亀島君の家さ」

「え、じゃあ、亀島に呼び出されたの？」

「彼のお母さんが許可してくれると思うかい？」

「いいや、思わない」

昨日の出来事が思い出されて、不意に胃が重くなった。

でも、負けてばかり、逃げてばかりでいるわけにはいかない。

ぼくは、御器所一だ。それを恥じちゃいけない。

ぼくは、門柱の脇のインタフォンに顔を向けた。ずっと、ぼくたちの様子は誰かがモニターしているはずだ。

「悪いけど、誰か車を回してくれない？」

「わかりました、お坊ちゃん」

すぐさま、関西なまりのゲンジさんの声が聞こえた。

三十秒もしないうちに、黒塗りのベンツがゆっくりと近づいてくるのが見えた。

「御器所君……君は……」

「ぼくは、亀島のお母さんになんか、負けないよ。ぼくは誰が何と言おうと——ぼ

くが望んだわけでもないけど——御器所一なんだ」

不老翔太郎は、ほんの一瞬だけ、眼を見開いた。

「君の言いたいことはわかるつもりさ。僕だって、とてもプライドを傷つけられた——間違いなくつまらない感情に違いないだろうけれど——僕もいたくプライドを傷つけられたんだ。いまや、これは事件じゃなくて、僕のパーソナルな問題だ」
珍しく、不老はいら立った感情を見せた。

ダークスーツに身を包み、オールバックの髪がつやつやと光っているゲンジさんが、ベンツの後部座席のドアを開いた。

ちらつと不老を見やると、ゲンジさんは少しだけ相好を崩した。

「お坊ちゃん、どこに行かかります？」

ぼくが答える前に不老が運転席のゲンジさんに向かって身を乗り出した。

「亀島・ヒューティ・デンタル・クリニック」という歯医者さんをご存じですか？」

「ああ、聞いたことがありますわ。この街の金持ち御用達の歯医者ちゃいます？　なんでまた、そんなと……」

「同級生の家なんだけど……組内と何かあったの？」

十数秒、ゲンジさんは黙っていたが、つぶやくように言った。

「お坊ちゃんに言うてもしゃあない話ですけど、なんか、氣イ悪いんですわ、あそこ。一度、姐さんが行こうとしてはって、予約の電話入れたら断られたことあるんですわ。あそこの爺さん、この街で十二期——つまり五十年近くも市議員務めよって……そんなこともあって、組内とはいろいろ長い歴史があるみたいなんですわ」
「そうだったんですか。その曰く付きのお宅まで、お願いできますか？」
不老はそう言うのと、両の手の指先をあわせ、中途半端な合掌をして、うつろな目つきになった。どこか遠くを見ているようだった。

ゲンジさんはわざわざ後部座席を振り返った。

「ええんですか、お坊ちゃん？」

「うん、もちろん構わないよ」

「ほな、行きますけど……何かあったら、わしもおやつさんや姐さんに顔向けできません。真つ先に跳び出して、お坊ちゃんには指一本も触れさせしまへんさかい、安心して下さい」

いや、それがかえってこつちには困るんだけど……とは言えず、ただ、黙ってうなずいた。

ベンツはほとんど音もなく出発した。

「さあ、不老、教えてよ」

「何を？」

「全部、何もかも！ ぼくだって馬鹿じゃない。夕べ、いろいろ考えた。どうして、亀島はぼくたちをあんなふうに放り出したんだ？ いや、その前に、どうして被害者であるはずの亀島が、真犯人をかばう必要があるんだ？」

「それは亀島君に直接訊けばいい」

なぜ、いちいちもつたいぶつた態度を取るのだろうか、この男は。

「不満のようだね」

「不老も、犯人がわかってるの？」

不老は、おおげさにため息をついた。

「いちばん最初に僕が言ったことを覚えてないようだね。今度の事件は『フーダニット』としても『ハウダニット』としても簡単だが、『ホワイダニット』としては難しい、と。『犯人は誰か？』なんて、それは些末な問題さ」

「些末な問題つてことはないだろう。やっぱり、犯人は……？」

「そう、植田アントニオ君……」

「植田が……どうして？」

ぼくが昨夜一生懸命に考えた末に浮かんだ真犯人の名前だった。

「人の話は最後まで聴きたまえ」

「その、『たまえ』はもういいって。植田は亀島の親友だよ。どうして事件を起こさなきゃいけない？」

「僕は植田君だけが犯人なんて、一言も言っていない」

「ということは、やっぱり共犯者が……？」

「僕は時間を無駄にしない主義だ。昨日、君と別れた後、僕は荒畑力哉君の家に行き、桜山俊介君の家に行き、それから白鳥あやめさんの家にも足を伸ばした。歩き過ぎていまだにふくらはぎが筋肉痛だよ。そこで、実に興味深い、いや、予想通り

の結論を得た」

「どんな？ あ……聞かなくてもわかる。萱場先生が、三人の家には来ていない。そういうことだろう？」

「お見事！ そのとおり。裏付けは取らなければならない」

「つていうことは、共犯者は……」

言いかけて、ぼくは唾をぐくり、と飲み込んだ。妙に苦い。それ以上を言う必要はなかった。

そしてぼくは思った。

今、これから不老とともに亀島の家に行くことが、果たしていいのかどうか？ 急に自信がなくなった。口のなかが乾いていく。

いつたい、「事件」とは何なんだろう？

いつたい「謎」って何なんだろう？

解決しなくてもいい「事件」、明らかにしなくてもいい「謎」もあるのではないか？

ぼくは、憂鬱な気分になった。

「ねえゲンジさん、うちに戻って」

運転席に向かつて、ぼくは言った。

「ええんですか、お坊ちゃん？ いやあ、盗み聞きしてたわけじゃないですけど、それでお坊ちゃん、納得できますか？ ホンマ、出過ぎた真似して申し訳ない思います。お怒りでしたら、どうぞおやつさんに言うてくれて構しまへん。けど……オトシマエつけなあかんことって、あるんちゃいますか？」

ぼくの胸に「オトシマエ」という単語は重く重く響いた。

「俺みたいなしようなないハンパもんでも、おやつさんは拾うてくれはりました。まだお若いのに『スジ通す』いうことを知ってはります。今、お友だちの不老君……でしたね、スジ通しに行きはるんちゃいまつか？」

ぼくには、返す言葉がなかった。

「詳しいこと、全然知りまへんけど、つまり全部終わつとるちゆうことなんでしゅう？ せやかて、不老君は行かなあかん思うてはる。俺は——ホンマすんません——不老君の考え、ようわかるんすわ。どないしてもスジ通さなあかん、ちゆう

気持ちか」

ぼくは黙ったまま膝のあたりを見つめていた。

「ごめんね、ゲンジさん。やっぱり、目的地は変更しないで」

「お坊ちゃんが謝られることありまへんよ」

ぼくらを乗せたベンツはそのまま進路を変えなかった。

ゲンジさんがベンツを走らせているあいだじゅう、ぼくはずっと黙っていた。不老のほうをときどき盗み見すると、長い両脚を折り曲げ「体育座り」のような姿勢になり、半眼になっていた。

ぼくは、ただぼんやりと窓の外の風景を見ていた。ゲンジさんは、見かけによらずに、安全運転だった——あくまでも、「御器所組」の若い衆のなかでは、だけど。

十分もしないうちに、ベンツは「亀島ビューティ・デンタル・クリニック」の前に横付けされた。しかも、駐停車禁止の標識の前に。

ぼくと不老は車を降りた。が、数歩歩きかけたところで、不老が歩みを止めた。

玄関脇に、見覚えのある250ccのバイクが停められている。

一足遅かったかもしれない。その思いを無理矢理飲み下した。

不老は、静かに言った。

「君は黙り込むという、素晴らしい才能を持っているね。だからこそ御器所君、君はかけがえのない僕の友人たり得るんだよ」

不老の口から「友人」なんていう言葉が飛び出してくるとは予期していなかった。

正直、ぼくはうろたえた。

「萱場先生は、ここに来たばかりだ。どこまで話が進んでいるかわからないが、亀島君がその場に同席していることはないだろう。御器所君、亀島君に電話してくれるかい？」

言われるがままに、ぼくは携帯電話で亀島にコールした。

留守電につながるか、と思つた瞬間に、電話の向こうから亀島のいら立った声が聞こえた。

「窓からずっと見えてたよ、真つ黒なベンツが！ あんな車で堂々と、何しに来たんだ？」

不機嫌極まりない、といった声で亀島は言った。

「もちろん、事件を解決しに……」

「だから、梅干しの話はもういいって、昨日言っただろう？ もう全部『解決』した。それより、さつき、萱場先生が来たんだ。今も階下でおふくろと話してる」

「知ってるよ。でも、ぼくも譲れないんだ」

「な、何言ってるんだ？」

不意に、携帯電話を取り上げられた。不老だ。

「いいかい、亀島君。すでに真犯人もわかつている。その手法も、昨日、君に告げたとおりだ。しかし、まだ解決していない謎……つまり動機が、今の我々にはわからない。おそらく、君にもまだわからないと思う。それを解明するまでは、僕は諦めることができない」

ぼくは不老から携帯電話をもぎ取った。

「ねえ、亀島。犯人を『許す』って言うんだろう？ たとえ……犯人が友だちでも」

ぼくは、ごくりつ、と音を立てて唾を飲み込んだ。が、電話の向こうは無言だった。

ぼくは続けた。

「それは構わない……と思うよ。けれど、なぜ亀島にとって大事な友だちがそんなことをしたんだろう？ それを知るほうが、『犯人捜し』よりも大事なんじゃないかな？ だってさ、動機がわからないまま亀島が勝手に許しても……向こうは亀島を許していないかもしれないよ……」

やっぱり、沈黙しか返ってこなかった——そして、空電音。亀島は電話を切ったのだ。

予想した通りだったが、妙に淋しい思いにもとらわれた……が、それもほんの二十秒ほどしか持続しなかった。

と、携帯電話が振動し始めた。

メール着信は、亀島からだった。

——玄関の右手、塀と建物のスキマから裏に回れる

素っ気ない文章。

脇から覗き込んだ不老は、もう歩き出していた。

「さあ、行こうか、御器所君」

足早にぼくたちは亀島の言うとおりの道筋で、へ亀島ビューティ・デンタル・クリニックの裏手に回った。

一見するとわからないような、小さな勝手口のような地味なドアがあった。すでに、ドアは開き、亀島が待っていた。

「こつちの階段から部屋に上がれる。靴は、ドアの脇にでも置いといて」

うながされるまま、ぼくと不老は、抜き足差し足で、亀島家に踏み込んだ。

雑然と掃除用具の置かれた物置スペースのような場所を抜けた。

かすかに女性二人の話し声が聞こえた。内容までは聞き取れなかった。しかし、一人は静かな口調で話しているのに対し、もう一人はやや甲高い声で感情的になっている様子だった。

亀島がため息をついた。そのいつぼうで、不老は実にあっけらかんとした表情だ。階上につながる階段を上った。まるで、オフィスのような階段だった。が、ぼくたちの目的地は、二階ではなくて三階だった。二階にも、クリニックとしての検査室や処置室のような部屋があるらしい。

三階に上がると、人家らしくなってきた。亀島は廊下を進み、一つの部屋にぼくたちを通した。

亀島の勉強部屋に通されるのかと思っていたが、そうではなかった。ソファが並んでいるが、それは約二十畳ほどの広さの部屋の半分だけだ。しかも、それらはみんな部屋の奥を向いている。

どうやら、ここはホームシアターらしい、と気づいた。天井を見上げると、案の定、ビデオ・プロジェクターがセットされている。各所からぶら下がっている四角く黒い箱はスピーカーなのだろう。

きつと、どこかのボタンを押すと、スクリーンが降りてくるに違いない。「ホームシアターというより、ちよつとした「映画館」だった。

「あんまり長くいてもらっても迷惑なんだ。話すだけ話したら、とつとと帰つてくれないか？」

亀島はいら立った声を不老にぶつけた。

不老は、ちらり、と平針を一瞥すると、亀島に向かって身を乗り出した。

「どうに亀島君は気づいているはずだが、犯人は二人」

「それはわかつてるよ」

「一人は、植田アントニオ君、もう一人は、小幡美桜さんだ。そうだね」

ぼくは唾を飲み込んだ。苦かった。

「もつと正確に言えば、梅干しの種を調達したのは、小幡さん。盛りつけ時に混入したのは植田君。それを君のもとへ運んだのは、小幡さんだ」

亀島はうつむいた。歯を食いしばっているらしく、顎の筋肉がこわばっているのが見て取れた。

「どうしてわかったの？」

ぼくはいつものように愚問を発した。

「そのために、わざわざ無礼を承知でキッチンへお邪魔したのさ。まず僕が疑問に思ったのは、亀島君の給食に混入されていた梅干しの種自体だ」

そう言つて、不老はポケットからティッシュにくるまれた種を取り出した。

「なぜ、これほどまで丁寧に実を削り取られているのか？　そして、わざわざ洗剤で洗つてあるのか？　亀島君に嫌がらせをするのであれば、食べた梅干しをそのまま食器に『ぺっ』と口から直接、放り込んでしまえばいい」

亀島が、露骨に嫌悪感をあらわにした。

「梅干しを食べたのであれば、この種に歯形が付いていてもおかしくない。しかし、この種には、細かい傷こそあるが、歯形は付いていない。ちなみに……」

そう言いながら、不老はポケットからもう一つのティッシュの包みを取り出し、広げた。それは、亀島の給食に混入されていた種より、一回り小さな種だった。

「僕も実験してみた。やはり、どうしてもこのように歯形が付く。できるだけそつと食べたつもりだったけど、これだけの傷は付いてしまう。安心したまえ、洗つてあるから。おかげで、七つも梅干しを食べるはめになった。あとで喉が渴いて渴いて、参つたよ」

確かに、不老の言うとおりだった。不老の種には、もつといびつな太い傷が付いていた。

「つまり、梅干しの調達者は、そこまで下品なことができなかった。こんなに優し

い脅迫者はいない。性差別的表現かもしれないが、種を見た時点で、僕は調達者が女性だと断定した。あとは、小幡さんのお宅にお邪魔したときに、確信したよ」

「じゃあ、水を飲んだのは……」

「無論、キッチンで自家製の梅干しを漬けていないかどうかを調べるためさ。黒川さんのお宅では、梅干しが見つからなかった。いや、もしかしたら冷蔵庫のなかにあったのかもしれないが、洗剤が違っていた。この種は無臭タイプの洗剤でこすつて洗われている。黒川さんが調達者なら、種からは『フレッシュオレンジの香り』がするはずだ」

はつと気づいた。

「じゃあ、不老は小幡さんの家で、梅干しを見つけたの？」

「いや、正確には漬ける前の青梅と焼酎だけだね。自家製梅干しはこれから漬ける時期に入る。そして、夏の『土用干し』を行なう。この種の大きさから考えて、梅のサイズは3L。まさに同じものが段ボール箱に入っていたよ」

「でも……アントニオがどうして……?」

亀島の問いはもつともだった。不老は、わずかに眉をしかめた。

「それは、正直なところ、物証は何もない。ただ、亀島君。植田君をかばうために、彼が小幡さんと同じ県営住宅に住んでいることを黙っていたのは、ただだけないな。昨日、僕たちと別れたあと、銀河さんと一緒に歩いた先は、同じ県営住宅内の植田君の家の前だったんだらう? そして、そこで萱場先生のバイクを発見した」

亀島は黙り込んだ。

「それに、夕べのうちに確認したよ。萱場先生は、一班の他の人の家には行っていない」

亀島は無言だった。

「亀島君、君は動機に心当たりはないんだらう? おそらく、ぼくたちにも掴むことはできない。ただ、推測することはできる。亀島君、植田君、小幡さん……この三人には共通する『何か』がある。それこそが事件を引き起こした原因であり、萱場先生が頻繁にこの三人の家に来訪する理由でもある」

不老は立ち上がった。

「これから僕がすることは、おそらく君をいたく傷つけることになると思う」

ぼくは狼狽して声を上げた。

「タイム！ まさか不老、直接、萱場先生に……」

「そして、亀島君のお母さんに、ね」

歩き出そうとする不老に、亀島が追いつがった。

「待て、待ってくれ！」

不老は、じつと亀島を見返した。

「俺も行く。俺が、直接、おふくろから話を聴く」

「僕たちは、亀島を先頭に階段を下りた。」

一階は歯科医院というより、高級ホテルのような雰囲気を漂わせていた。分厚いワインレッドの絨毯が敷き詰められている。壁は大理石だろう。廊下に面した木製のドア——「Conference Room」と彫られた金属板が貼つてある——をノックもなしに、亀島は一気に引き開けた。

白を基調とした、清潔感に満ちた十畳ほどの部屋。窓はないが、暖色系の間接照明が、柔らかく室内を照らしている。

が、部屋の雰囲気とはまったく逆に、怒りと憎悪のどす黒い空気がそこには充満していた。

白く塗装されたテーブルをはさんで、同様に白い革張りのソファに向かい合って腰掛けていたのは、萱場先生と、白衣姿の亀島のお母さんだった。

「佑くん！ 何をしてるのっ！ それに……その子たちは誰？」

詰問口調だった。ぼくの父さんや母さんよりも年上だろう。やせ形の亀島とは違って、やや太めだ。派手な金色のイヤリングが耳から下がり、唇は明るめのルーージュ。髪もブリーチしているのだろう。束ねることなく、そのまま肩の下あたりまで伸ばしている。爪には口紅とほぼ同じ色のマニキュア。とても医者には見えない。

白衣は「歯科医」であることを誇示するための小道具に過ぎないのだな、とわかった。というのも、うちの「若い衆」のみんなも、身に着けるもので——それが似合っていてよいといまいと——自分がヤクザ者であることを誇示しているから。

「ちよつと御器所君に不老君まで、いったいあなたたち……」

うろたえた萱場先生の声。

「御器所……君？」

心なしか、亀島のお母さんの紅潮していた顔色が、血流量を失ったように見えた。ぼくは大きく息を吸い込んだ。

そして、亀島のお母さんから眼をそらさないように、はつきりと言った。

「はじめまして。亀島君と同じクラスの御器所一です。こちらは友だちの不老翔太郎です」

「ちよつと……あなたたち、わたしはうちに入れるのを許可した覚えはないわ！」

「俺が許可したんだよ」

亀島が静かに言った。

「ママ、つまらない意地を張るのはやめてよ」

あれ？ 亀島の言葉づかひまで変わっている。どうしたんだ？

不老はというと、無表情なまま、亀島母子をじつと見ている。

「佑くん、あなたは黙ってなさい！」

「いや、黙らない。ママはいつもそうだ。俺はママの道具じゃないし、アクセサリーでもない。ママの身勝手のせいで、俺は友だちを失ったよ」

「いいからお黙りなさい！ 友だち？ あのブラジルかどこかの子？ あんな子とつきあうなんて、ママ、驚いたわ！ それだけじゃない。佑くん、いつたいどうしちやったの？ 朝鮮人やら、ヤクザの子やら……ああ、ママはそんな子に育てた覚えはないわ！ 情けない……」

不意に、亀島は黙り込み、がつくりと肩を落とした。

そして、聞こえるか聞こえないか、という小さな声を亀島は漏らした。

「そんな育てられ方、したくなかった……」

「亀島君」

口を開いたのは、萱場先生だった。

「お母さんに謝りなさい。親に向かって、そんな口を利くものじゃありません」

萱場先生の「ホンモノの先生の顔」を見たのは、久しぶりかもしれない。

「さあ亀島君、謝りなさい」

亀島は一瞬、気圧されたような表情になった。そして、お母さんを見ると、頭を下げた。

「ごめんなさい……でも、俺はママが正しいとは思わないよ。ママだって、間違うことがあるでしょう?」

が、あろうことか、亀島のお母さんは萱場先生をにらみつけ、吐き捨てた。

「ちよつと待つて下さい、先生。いつたい、うちの子が何をしたつて言うんです? 親でもないくせに、何の権利があつて、謝らせるんですか? だからわたしは、あなた方にうちの子を任せられないのよ」

萱場先生は、まっすぐに亀島のお母さんに顔を向けた。

「教育基本法第五条の2、義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする——そのために、わたしたち教師がいるんです」

唐突に、亀島のお母さんは笑い出した。

「あらそうなの? だったら、ろくでもない出来損ないばかり生み出しているあなたたちは、教師失格ね。この街が、この国がますます汚染されていることにも気づかないくせに、ご託を並べるのもいい加減にして欲しいわ。本気で世の中に役立つ子どもたちを育てるといふなら、あなたたちの『悪平等主義』に付き合つてあげます。だからこそ、払わないんじゃないの。教育委員会だか文科省かどこかしらないけど、文句があるなら、もっと上の人を連れて来なさい」

はつと不老翔太郎が顔を上げ、怒鳴るように言った。

「そういうことか!」

たつぷり六秒ほど、室内に沈黙が落ちた。

「な、何が?」

小声でぼくは不老にささやいた。しかし、不老の答えはささやきどころか、部屋中に響いた。

「梅干しの種は、亀島君への嫌がらせや脅迫ではなかった。メッセージだったんだ!」

「な、何言つてるんだ、不老?」

亀島も狼狽した様子で、不老とお母さんを交互に見た。

萱場先生は立ち上がった。

「御器所君、不老君。心配をしてくれたのは、とても嬉しく思います。さ、今日のところは……」

が、萱場先生の声は不老の耳に届いていない様子だった。そわそわと室内を行ったり来たり歩き出した。

「そもそも、なぜ梅干しの種だったのか、僕は事件のスタート地点に戻って考えたことがなかった。実に間の抜けた話だ。亀島君に嫌がらせをするなら、もつと不愉快なもの……例えば小石だって、あるいはゴキブリだって、大量の下剤だってよかつたはずだ。なのに、かりに食べてしまつてもさして害のない梅干しの種……しかも、手間をかけて、きれいに洗つたものを使つた。植田君と美桜さんは、最初から亀島君を傷つけるつもりはなかった。植田君と美桜さんに、亀島君を恨む怒りや悪意は——なかつたといえればウソになるだろうが、それよりも、君に知って欲しかつたんだ。気づいて欲しかつたんだ」

その瞬間だった。

玄関のチャイムが鳴つた。来客のようだった。

「ああ、もういつたい今日つて日は何なの？ わたしだけで、どう対処していけばいいつていうのよ？ いつもいつも、わたしばかりが矢面に立たされる……どうしてわたしばかり……」

亀島のお母さんは、チャイムを無視し、ソファにへたり込むように身を沈めた。

「お客様ですよ」

萱場先生は穏やかな口調で言つた。が、亀島のお母さんは、すっかり疲れ切つている様子だった。

「勝手になさい。知つたことじゃないわ。払えばいいんでしょう、払えば。いくら？」
投げやりな口調で亀島のお母さんは言つた。

「書面で何度もお渡ししているはずですよ。十一ヶ月分の給食費、四万七千三百円になります」

亀島のお母さんは、ゆつくりと立ち上がると、部屋から出て行つた。そして、三十秒とかからないうちに、財布を手に戻つてきた。アルファベットのCの文字を二つ組み合わせたロゴが入っている。

亀島のお母さんは、無造作に財布から一万円札を五枚抜き出し、萱場先生に突き

つけた。

「お釣りは要らないわよ。領収書も」

「いえ、お母さん、所定の口座に振り込んでいただかないと……」

萱場先生は狼狽し、その拍子に手から五枚の一万円札がひらひらとテーブルの上に舞い落ちた。

亀島のお母さんは、憔悴した様子でソファに座り込んだ。

と、そのときだった。

「おい亀島、俺たち、おまえに話すことがあるんだ」

何の前触れもなく、開け放たれたドアの向こうから、声が聞こえた。

「アントニオ……?」

そこに立っていたのは、植田アントニオと小幡美桜、そして金銀河だった。

「あなたたち……」

萱場先生が、唾然とした面持ちで、かすれた声を漏らした。

「ちよつと御器所君、何度も携帯に連絡したんだからね!」

金銀河の怒った声。

金銀河に会うとき、ぼくはほとんど怒られてばかりのような気がする。

ポケットのなかを探って携帯電話を取り出した——バッテリー切れ。なんてこつた。

「それから不老君、出し抜こうたって、そうはいかないんだから」

「出し抜く? そんなつもりはないよ。ただ、銀河さんが現れたのは意外だったね」

「玄関が開いてたし、大声がドア越しに聞こえたから、黙って帰るわけにいかないじゃない」

「なるほど。いずれにせよ、植田君と美桜さんは来てくれると思っていたけれどね」

「えっ?」

「昨日、美桜さんのお宅にお邪魔したとき、美桜さんは銀河さんと出かけた、とお母さんがおっしゃっていた。無論、銀河さんは僕たちと一緒に行動していたから、明らかにウソだ。なぜ、ウソをつかなければならないのか? 今回の『梅干しの種』事件について、植田君の家に相談に行っていたのだろう。あろうことが、そこへ萱場先生が現れた。萱場先生が、今回の事件の真相に気づいていたことを、改めて知

った。そこで美桜さんとアントニオ君は、すべてを告白すべきだ、との結論に達したんじゃないかな？ さて、話を聞こうか。いや、聞くべきは僕ではなく、亀島君と亀島君のお母さんだろうけれど」

植田アントニオは一步前へ踏み出した。そして、テーブルの上に散らばる五枚の一万円札に気づいた。少し哀しげな表情で五枚の一万円札を見ながら、植田は静かな口調で言った。

「佑作、俺はおまえを許してないぞ。今でも怒ってる。けれど、俺のやり方が間違ってた。あんな卑怯な真似をするんじゃないかった」

が、同様に一步前に踏み出して来たのは、小幡美桜だ。

「ううん、アントニオは悪くないよ。考えたのは、わたしだから。すごく浅はかだった、つて反省してます。ごめんなさい」

小幡美桜は亀島に頭を下げた。

亀島は慌てて、助けを求めるように、不老を見た。が、不老は無表情なまま、何も言わなかった。

「い、いや、なんで謝るんだよ。謝られても困る。もとはといえば、俺が全部悪かったんだ。何も知らなかった俺が。何も気づかなかった俺が。アントニオたちのサインに気づかなかった俺が……」

出し抜けに、亀島は、分厚い絨毯の上に膝を着いた。そして、上下座をした。

「このとおり謝ります。ごめんなさい」

一瞬の沈黙の後、アントニオの鋭い声が響いた。

「バーカ！ やっぱり、まだわかってないな。そこが、おまえの甘いところなんだよ。ほんとうに謝る相手が違うだろう」

亀島は、はつとしたように顔を上げた。そして、ゆつくりと立ち上がり、萱場先生のほうを向いた。

「先生、ご迷惑おかけして、すみませんでした」

「すみませんでした」

植田と小幡も、一緒に萱場先生に頭を深々と下げた。

萱場先生は、ソファでうなだれている亀島のお母さんの背中に向かって言った。「来週の金曜までに、振り込みをお願いします。それ以降もお納めいただけません」

合は、もう一度、いえ、何度でもお伺いします」

それから、今まで見たことのない優しい顔を亀島、植田、小幡の三人に向けた。

「ごめんね、みんな。あなたたちをこんなことに巻き込みたくはなかったのに。教師失格かな……」

萱場先生の声は震えを帯びていた。

失格だなんて、とんでもない話だ。こんなに亀島や植田や小幡のことを気づかない、身も心もすり減らしてくれる先生なんて、そんなにいないはずだ。

「さて、僕らもおいとましよう」

不老は言った。

「ああつ！」

思わず声を上げてしまった。

「どうしたの？」

金銀河が珍しく、ぼくを心配そうに見る。

「ゲンジさん、待たせたままだった……」

組内でいちばんの武闘派であるゲンジさんだ。まったく何の連絡もせず、路上駐車したベンツで長時間待たせてしまったにも関わらず、今まで殴り込んで来なかったのが奇跡だ。

「急がなきゃ……ヤバイかも」

「もつともだ、御器所君」

と言いながら、ぼくよりも先に駆け出したのは不老だった。

ぼくには、知らないことがたくさんあった。

小幡美桜が、自分の給食費未納について知ったのは、二週間ほど前のことだったという。ちょうど、小幡が自宅にいる夕刻に、萱場先生が小幡の家に来たのだ。小幡自身は、自分の家が給食費を納めていないことをまったく知らなかった。

小幡の家に行ったとき、小幡美桜がどんな生活をしているのか、おおよその見当はついた。しかし、小幡が二年生のときにお父さんが亡くなり、ずっとお母さんと二人暮らしだということは知らなかった。そしてまた、ぼくと不老が直接会ったお母さんが、実は膠原病の一種である「シェーグレン症候群」という病気（その症状

の一つは、眼や口の乾燥だという)に罹り、パートを辞めざるを得なかったことも知らなかった。もちろん、生活保護を受けていることだって、知らなかった。

知らないことが、あまりにもたくさんあった。

植田アントニオのお父さんは、大手自動車会社の下請けの下請けのそのまた下請けにあたる小さな工場で働いていた。が、ここ数年の不況の影響なのか「外人だから」という理由で真つ先に首を切られ、今では「レインボー・タウン」で、夜の九時から早朝五時までの倉庫作業をしていることは知らなかった。それに、植田アントニオには、幼稚園に通う弟、ホアキンと、二歳になったばかりの妹、ニーナがいることも知らなかった。

同じ県営住宅に住んでいる住人同士として、小幡のお母さんと植田のお母さんが親しかったということも、知らなかった。

そして、六年四組には「給食費未納」の生徒が三人だけいた、という事実——それもまた、知らなかった。

けれど、小幡は知ってしまった。

三人目の未納者が、亀島佑作であることを。

小幡がふと漏らしたその言葉に、植田は激怒したという。

植田の気持ちもわかるような気がする。親友だと思っていた亀島佑作に裏切られた気分だったろう。

そして、なんという偶然だろうか。六年四組では席替えが行なわれた。小幡と植田は同じ班になった。

くじ引きで行なわれた席替えの結果にもっともショックを受けたのは、萱場先生だったに違いない。あろうことか、植田と小幡が同じ班になり、一週目に給食当番を担当することになったのだ。

給食費を「払えない」小幡と植田。

そして、払えるのに「払わない」亀島。

萱場先生の心配は的中した。

亀島の給食への「梅干しの種」混入事件が起こってしまった。すぐに——不老よりも先に——萱場先生は事件の真相に気づいた。

折しも、マスコミでも「給食費未納問題」が声高に報道されている時期だった。

たぶん、職員室の萱場先生は針のムシロに無理矢理座らされた気分だっただろう、と思う。

萱場先生は、その週に走り回った。給食費未納の三人の家へ、何度も足を運び、未納分の一部でも払ってもらおうとした。

その結果、萱場先生は冷静ではいられなかったのだろう。異様に早く教室に現れたり、そのいっぽうで漢字テストを忘れたり……。

そんななか、萱場先生は懸命になって、亀島のお母さんと対峙したのだった。

月曜の朝、ぼくは教室に入るのが憂鬱だった。入り口でためらっていると、背後から不意に背中をたたかれた。

不老だった。

「ねえ不老……」

「また事件かい？ 勘弁して欲しいな。このところ睡眠不足なんだ」

ぼくはため息をついた。

ふと顔を上げると、亀島佑作が、植田アントニオにドッジ・ボールを投げる姿が見えた。植田は見事に足で受け、二、三度リフティングすると、逆に亀島にふわつと蹴り返し、受けきれなかった亀島が尻もちを着いた。

いっぽう、小幡美桜は、白鳥あやめと昨日のテレビ番組について笑いながら話している。

「ちよつと二人とも、そこに立つてられると教室に入れないうだけだ」

背後から金銀河の声が聞こえた。

金銀河も、表情はどこかしら硬かった。そして、教室内を見回して、つぶやいた。

「解決した……のかな？」

不老は、ゆつくりと顔をぼくに向けた。

「御器所君は、どう思う？ ほんとうに解決したんだろうか？」

ぼくは口をつぐんだ。

亀島のお母さんは、給食費を納めたのだろうか？

植田と小幡の家は、給食費を払えるようになったのだろうか？

萱場先生の孤独な闘いはまだ続いているのだろうか？

チャイムが鳴った。と同時に、萱場先生が現れた。眼の下に隈を作っている。

「さあ、席に着きなさい」

ぼくたちは無言のまま、それぞれの席に向かった。

そのときには、ぼくはもちろん、不老翔太郎も金銀河も、まさかぼく自身が事件に巻き込まれるなんて、0・1パーセントも想像していなかった。

第四部「二つの署名」につづく